

從青

東京大学広報誌 [TANSEI]

The University of Tokyo Magazine January, 2006 Vol.17

2006/01 17

[特集]

卒業生 —それぞれの志を胸に—

[巻頭対談] **知識人になるということ** —大学と教養教育—

ゲスト 大江健三郎 (作家) / 古田元夫 (東京大学副学長)

[教育・研究の現場から]

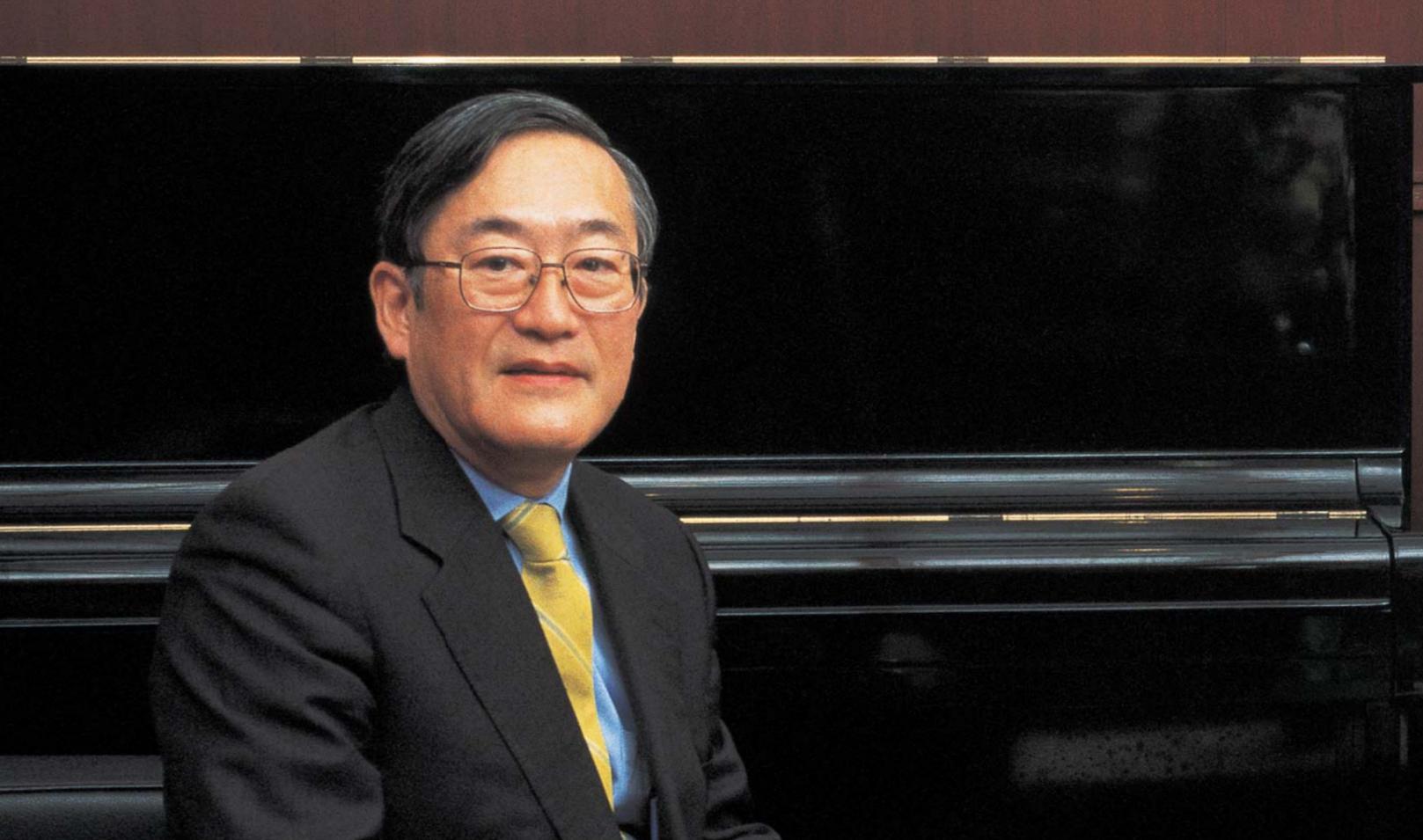
法科大学院 / 生産技術研究所

[サイエンスへの招待]

運動器と運動の大切さを知る / バイオマスからの輸送用液体燃料製造

[キャンパス散歩]

人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設



池田良剛

〔 巻頭対談 〕

知識人になるということ

— 大学と教養教育 —

大江健三郎 作家
古田 元夫 東京大学副学長

社会の枠組みにおいて大きな変化が起き始めている現在、学窓を巣立つ卒業生達にも「海図なき航海に耐え得る人材」たることが求められています。そこで、今回の巻頭対談では、本学の卒業生であり、最近、『さようなら、私の本よ!』を上梓されたノーベル賞作家、大江健三郎氏をお招きして、古田元夫副学長とご対談いただきました。

淡青

[TANSEI] 2006/01 17
東京大学広報誌 第17号
The University of Tokyo Magazine January, 2006 Vol.17

「淡青」について
東京大学と京都大学(当時は東京帝国大学、京都帝国大学)が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行った際、抽選によって決まった色が「淡青(ライト・ブルー)」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。

淡青17号をお届けいたします。今回は特集として、東京大学の卒業生を取り上げました。本学では毎年およそ3000名の学部生、3000名の大学院生が卒業・修了し、社会のさまざまな分野へと巣立っております。ここでは、東京大学卒業生の幅広い分野における活躍ぶりにスポットをあててみました。
対談のコーナーでは、本学文学部の卒業生であるノーベル賞作家の大江健三郎氏をお招きし、学生時代のこと、そして大学における教養のありかたなどをめぐって、古田副学長とお話いただきました。
また、卒業生の多彩な活動の一端として、宇宙飛行士の野口聡一氏、そして禅の修行とその普及につとめられる藤田一照氏を取り上げました。
あわせて本学における卒業生組織の活性化に向けての取り組み(学友会、ホームカミングデイなど)も紹介いたします。
宇宙から精神世界に至るまで、まことに幅広い舞台に立つ東京大学卒業生の活躍ぶり、その多彩さをご覧いただければ幸いです。

広報委員会委員長 大木 康

Contents

02 [巻頭対談]
知識人になるということ
ゲスト 大江健三郎 (作家)

12 [特集]
卒業生 — それぞれの志を胸に —

20 [教育・研究の現場から]
法科大学院/生産技術研究所

22 [サイエンスへの招待]
運動器と運動の大切さを知る/バイオマスからの輸送用液体燃料製造

24 [キャンパス散歩]
人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設

26 キャンパスニュース



「学志」を喚起するために

古田 最近、私は学生に対する相反する2つの評価の間で揺れています。ひとつは「非常に優秀な学生が増えている」ということです。私はベトナムの研究をしておりますが、ベトナム語は6つの声調がある言語で、日本人にとって、聞いたり話したりするのが難しい言葉なんです。しかし、最近の日本の若い学生の発音は、すばらしいものがあります。ベトナム語は若い女性が話すとき小鳥がさえずるように聞こえる美しい言語ですが、そういう語学力を持つ学生が増えています。ちなみに、私のベトナム語はどう聞いても小鳥のさえずりとは無縁ですが(笑)。それから、学生のレポートや卒論などを見ますと、日本語表現が下手で、50枚以上になると論理が乱れるなど、甚だ不安になるのですが、そんな学生が博士課程に進んで書いた論文を見ますと、実に堂々たるもので「素晴らしい」と思うことが多々あります。そして、「私達の世代が持っていないものを備えた新しい力が育っているんだな」と思

うのです。

ところが、もう一方では外国語をマスターすることを面倒くさがる学生が増える傾向も出てきています。私のやっている分野は地域研究ですので地域言語をマスターすることは必要不可欠なのですが、「言葉を苦労して学んでフィールドワークをやってコツコツと資料を集めて、ひとつの成果をまとめていく」という姿勢を欠く傾向があるんですね。

我々はこの問題を学力の問題ではなくて、学への志という意味での「学志(がくし)」の問題だと考えておまして、どうすれば東京大学で「学志」を喚起できるかということが大きな問題意識になっていきます。今年度の入学式で、小宮山総長は「本質をとらえる知、他者を感じる力、先頭を走る勇気の3つの要素を備えるように努力してほしい」と新生に話されました。それはどこかで、私が今、申し上げた「学志」と関わるのかなと思います。

大江健三郎賞創設に際して大江先生が書かれた「文学の言葉を回復させる」という一文を拝読したのですが、「情報やテク

ノロジーが支配する社会で文学の言葉が痩せていくことに関する危惧」とともに「新たな文学の言葉が育ってくる可能性への強い期待」を持って、賞を作られたのかなと思います。私どもの「学志」をめぐる状況と同質のものを感しました。そのようなことも含めて今の学生に関するお考えをうかがえればと思います。

大江 今のお話をうかがって、駒場や本郷にいた頃の事を思い出していました。当時の私も、まず発音の上で言葉をマスターしてフィールドワークもできるようになることに憧れていたんですね。でも、難しかった。私はフランス文学科ですが、読むだけに徹したんです。1日に50ページくらい読むことにしたんですね。ですから、フランス語の会話はマスターできなかった。フランス人と議論したり調査したりできる人は非常に特別な人で、蓮實重彦さん(本学元総長)は大丈夫だったでしょう(笑)。当時はそういう人達は非常に特殊で一般の学生は話したりはできなかった。しかし、私は今でも東京大学に非常に感

どうすれば「学志」を喚起できるかということが大きな問題意識になっています。



古田 元夫

1949年生まれ。74年教養学部卒。78年大学院社会学研究科博士課程中退。95年教養学部教授。01～03年大学院総合文化研究科長・教養学部長。04～05年副学長(理事)



謝しているんです。東大で学んだことは「外国語を読むこと」。外国語の本を読む基盤を作っていたらと思うんです。英語の基盤、フランス語の基盤。大学入学から50年になりますが、1ページも外国語を読まなかった日はないと思うくらいです。私達、文学の人間は大体、本を読んでいけばいいんですが、本を一生読んでいくための方向づけをしていただいた。私はその基盤をもって文学の仕事をしてきたんですね。

古田 それは我が大学にとっても非常に嬉しいことですね。

大江 それから、20歳の時に駒場の生協で2冊の本を買いました。今でもそれを持っていますが京都大学の深瀬基寛先生が書かれた『オーデン詩集』と『エリオット』です。この2冊の特徴は原典が載っていること。オーデンの詩集は巻末に原典がある。エリオットのほうはページの下段に原典がある。当時の学生は丸善で原書を探したんですが、学生が買いたい本は

先生方が買ってしまっているのに手に入らない。そんな時に本が出たので買って読んだ。それを学生時代にずっと読んでいたので、私の初期・中期の仕事は明らかにオーデンの影響下にあるんです。『見るまえに跳べ』という小説を書きましたが、そのタイトルはオーデンの初期の詩の1行です。『我らの狂気を生き延びる道を教えよ』という作品のタイトルも上海事変の頃の中国人に成り代わってオーデンが書いた詩から来ています。私の初期・中期作品のオーデンの影響を開いてくださったのは深瀬基寛先生の本なんです。

最近、私は『さようなら、私の本よ!』という小説を書いたんですが、明らかにエリオットの影響によるものなんですね。駒場の時にもエリオットの詩を読んでいたけれども、初期のエリオットの『プルーフロックの恋歌 (The Love Song of J. Alfred Prufrock)』などは理解できた。ところが、『ゲロンチオン (Gerontion)』という詩を読むと、もう解らなくなるんです。それから、深瀬基寛先生の『エリオット』という本ではエリオットの晩年の『Four Quartets』と

いう作品を扱っていないんですが、当時、私は何とかして『Four Quartets』のテキストを手に入れたと思って、ブリテッシュ・カウンシルに行って写させてもらった。コピーなんかない時代ですからね。卒業後もそれを読んでいたけれど、ずっと解らなかつたんです(編集部註:現在、邦訳としては『四つの四重奏曲』大修館書店刊がある)。ところが、60歳を過ぎて神田の本屋で非常にきれいな『Four Quartets』を見つけました。ちょっと高かったんですが、それを買って電車に乗って読み始めたら、1行1行ずつと解る気がした、今まで読んでも解らなかつた長い詩が。それで夢中になって『さようなら、私の本よ!』を書いたんです。ですから、私は東大に作っていただいた「読む能力の基盤」に基づいてずっと生きていたし、仕事をしてきた。それが現在まで続いていて、学生時代に駒場で買った2冊の本は「私の人生と大学の関係」を象徴しているんです。

古田 大江先生の作家活動にそれほど影

東大で学んだことは「外国語を読むこと」。外国語の本を読む基盤を作っていたらと思うんです。



大江 健三郎

作家。1994年、ノーベル文学賞受賞。
<略歴は11ページ>



東京大学は「教養学部を残す選択をした大学」として教養教育の重要性を常に強調すべき立場にあるんです。

— 古田 —

響を与えた本を駒場で手に入れられたということ……嬉しい驚きです。

「永遠の大学」に学ぶ

大江 もうひとつ、駒場時代の私が幸福だったのは、非常に素晴らしい先生方に出会ったことです。高校時代、私は渡辺一夫さんの『フランス・ルネサンス断章』という岩波新書を読んで「この人に習おう」と決めました。それまでは大学に行く意思はなかったんです。うちは母子家庭ですしね。でも、東大に行って渡辺さんに習いたかったので、高等学校の勉強をすべてなげうって、受験勉強を始めました。1年目は落ちましたが、翌年合格して20歳の時に渡辺一夫さんの集中講義を初めて駒場で聞きました。100分の講義を2回聞いて、私は「人生の目的を達した」と思いましたよ。「こんなに素晴らしい人がいるんだな」と感じた。渡辺一夫さんを一言で言うと「知識人」という言い方が正しいと思うんです。フランス文学の専門家である渡辺さんと一体をなす「知識人としての渡辺一夫」があって、その人に習ったことが私の一生を決めました。私に「生きていく上での思想」があるとすれば、それは渡辺さんに教わってきたのだと思っています。先生の本を読むこと、先生にしばしばお会いすることで私の思想と人間が作られてきたんです。

古田 大学は、尊敬する人物との出会い

の場でもあったわけですね。

大江 本郷でのフランス文学の先生のひとはベルナール・フランクさんでした。フランクさんが話されるフランス語は私には聞き取れないので、友達にノートを見せてもらって勉強していたんですが、ある時、先生が『今昔物語』の翻訳をしていることをフランス語で話されました。その時は話された内容が妙に私に解ったんです(笑)。それで授業が終わった後に先生に質問に行きました。「あなたは古代の日本が非常に開放された文化的な環境だったと言われましたが、どういう点でそう思われたんでしょうか」と聞くと、先生は、まず、紙を取り出して私の言ったことを文法的に正しく書いて「こうでしょうか」と言われた。「はい」と答えます。その日以来、授業が終わって先生のところに行くといろいろと話してくださるようになったわけです。フランクさんはサンスクリット、中国語、日本漢文を読める人なんですね。最初の質問にフランクさんはこう答えてくださいました。

「唐の時代の中国には非常に開放的な国際文明があって、その文明を受け入れようとする人達に寛大だった。日本は唐の国際文明の開放性と寛大さを自然な形でどんなコンプレックスもなしに受け入れて日本文化を作ったのだ。今日、当時の日記を読み返してきたので、確かにそうおっしゃったと思います。さらに、フランクさんは「そのことを文学論としても、文化論

としても、文明論としてすらも、研究して本を書きたい」と言われました。私はそれを聞いて「この人は偉い人だ」と思ったんです。そして、「自分は山奥で生まれてフランス語も読むことしかできない人間だけれども、がんばれば外国の文明を受け入れることができるのではないか」と思いました。唐の時代に平城京や平安京の人間がそうやっていたのだから。私は「自分の文学を将来、外国に向かって開いていくものにしよう」と決心しました。

今度、私はフランス国立東洋語学校、ラング・ゾー (Institut National des Langues et Civilisations Orientales) の名誉博士号をもらうんです。今までやってきた仕事があるにしても、学問はないのだし、博士号をもらう資格があるはずはない、とは思いますが、その仕事の礎を築いてくれたのは渡辺先生やフランク先生であり、東京大学だったわけですから、もらいに行きます(笑)。

古田 今のお話、それから2004年度の本学卒業式でのご講演の中にもありましたが、渡辺先生の示唆によって、大江先生が3年ごとに主題を決めて、ある作家なり、詩人なり、思想家に取り組み、しかも多くの場合、直接、原典に取り組みでこれをして、エリオットで15人目になったというお話をうかがって「すごいな」と思ったんです。課題を決めて本を読む、直接原典で本を読む、それをもとにして小説を書くというスタイルの中に、高校時代に渡辺先



生の著書と出会ってから現在に至るまで、大江先生の中に「永遠の大学」があるのかな、と。

大江 「永遠の大学」というのは本当に正確な言葉ですね。

「知識人」であるということ

大江 大学を卒業する頃、私は「小説家になるので大学院には行きません」と渡辺先生に言いに行ったんです。当時、私は友人の妹と結婚しようと思っていて「お金が要るので小説を書こう」という邪な志で仕事を始めた頃でした(笑)。大学院に行かないことを話したら先生は初め不機嫌でしたが、やがて機嫌を直されて「小説家になって綺麗な方と結婚されるのもよろしいでしょう」と言われたんですね。私がニコニコしたと先生はその後よく言われたけど(笑)。まあニコニコしたんでしょう(笑)。続けて、先生はこうおっしゃったんです。

「小説だけ書いて一生を過ごす君は退屈するに違いない。退屈しないためには3年毎に主題を決めて、それを読むことにすればいい」。その次が重要なんです。「3年経ったら読むのをやめるように。なぜならば、3年経てば、ある詩人、ある作家、ある思想家の輪郭は掴める。しかし3年では絶対に専門家になれない。もし専門家になろうとするなら、次の3年もその主題の読書を続けなければいけない。そうす

ると君の視野はまず狭くなってくる。専門家が狭く深いのはいい。しかし、小説家が生半可な独学の勉強をして専門家になったつもりでいるのが一番いけない。君の先輩の仏文出身の小説家を見ろ」と言われた(笑)。私が外に対してこのことを話したのは今日が初めてですけどね(笑)。あの時、渡辺先生が言われた「3年間だけ読む方法」は、「知識人をつくるための教育」だったと思うんです。

古田 それはまさに、大学卒業後も「学志」を持ち続けることによって「知識人」となるということですね。

大江 まさにそうなんです…卒業式でも言いましたが、私はエドワード・W・サイドの『Représentation des Intellectuels』という本(編集部註：英語版は『Representations of the Intellectual』、邦語版は大橋洋一訳『知識人とは何か』平凡社刊)を読んで、彼と何度も話したことがあります。

「知識人は世界に対してははっきりと表現し、主張しなければいけない。それが知識人の条件だ」とサイドは言うんです。英語で言えばrepresentationあるいはrepresentという言葉が知識人の本質を強調している、と。さらに彼は「自分がどういふ人達を代弁しているかを意識せよ」とも言います。そこで自分のことを振り返ってみますと……私は「九条の会」という活動をやっていて「日本は憲法を変えずに平和主義でやっぺいこう」という主張を

持っている。そして、講演会などでそのことを明瞭に表現したいと思っている。また、「自分がどんな人達と一緒に発言しているか」を意識している……サイドが言うrepresentationをやっていると思うんですね。

古田 「学志」を持ち続けて「知識人」となられた大江先生は、そのような形で知識人としての「表現」を行なっているんですね。

大江 それから、もうひとつ、サイドは「アマチュアとして社会にrepresentすることが知識人の役割だ」と言います。知識人は自分の仕事の現場では専門家ですね。渡辺一夫先生はフランソワ・ラブレーの世界的な専門家。ベルナール・フランク先生は中国・日本の古代の研究から出発して、東洋の民衆信仰の専門家です。さらにサイドは「知識人による社会批評はモラルティ、倫理性を足場にする」と言うわけですね。

そのような考え方から、今、東大生に何を望むかと言いますと……専門家になれる少数のエリート諸君は「現地の人達と討論もでき、フィールドワークもちゃんどできるような勉強」をやってもらいたい。そういう方は「学志」を持ってやっている少数派ですが、少し怠けて外国語が面倒くさいと思っている人も「学志」という基本態度は大学にいる間に獲得すべきだと言いたいです。私は大学をそういう場



として考えているわけです。大学生の段階で「一生、本が読めるくらいの外国語力をつけること」、「その人のように生きたいと思う人物に出会うこと」、「専門家になるだけでなく『学志』を自分の中にかちとること」が重要だと私は考えています。

しかし、その一方で「社会に出てから有用な人間を養成する大学」がありますね。ハーバードビジネススクールのような。それはそれでいいと思っていますが。

「実学」と「虚学」

古田 今の大江先生のお話の中に非常に重要な論点が出てきていると思います。本学も2004年4月に法人化しまして、法人化のひとつの意味は「大学と社会の関係を見直すこと」にあると思います。ですから法人化と軌を一にして、いくつか専門職大学院を作りました。ロースクールや公共政策の専門職大学院を作って「社会との連携」を強化する試みをやっています。しかし、これは「社会的ニーズに直接対応するような狭い意味での実用的教育を重視する方向に東京大学が向かう」ということではないと、私は考えております。やはり、学問そのものの発展を促すような教育的課題も非常に重視していく必要があろう、「実学」だけではなく「虚学」も大切にしていく姿勢が必要だろうと。そのように考えますと、学部教育での大きな柱のひとつは「教養教育の重視」だと思っています。学生の間で「実用的

な資格をとりたい」という志向が強まっている状況の中でこそ、学問への動機づけを養い、知の形成と人間性の開花を促すような教育が必要なのではないかと思えます。それはおそらく、大江先生がおっしゃった「知識人たること」と同質なのだろうと思うんですが。

大江 まさにそうですね。

古田 社会の基本的なあり方が大きく変わろうとしている現在、「海図なき航海に耐え得る人材」を輩出していく必要があると思います。それはきっと「知識人」だと思うんです。東京大学は教養学部を今も残しておりますので「教養学部を残す選択をした大学」として教養教育の重要性を常に強調すべき立場にあるんです。幸い、本学だけではなく、日本の他の大学でも、北京大学、ソウル国立大学、ベトナムの国家大学など、アジア各国の大学でも、「教養教育」の重要性が見直されてきておりますので、多少、心強さを感じています。

大江 従来、日本では「教養主義」が他の国に比較してしっかりしていたと思うのです。例えば、私はパークレー、プリンストン、ハーバードといったアメリカの大学に何箇所かずつ、何度も行ってきただけですが、大学の中で人々と話している限りは「世界の普遍的な教養の中にいる」という印象があるんです。ところが、キャ

ンパスから一步離れると、教養主義的な雰囲気はないという印象を持つんですね。日本の場合は明治の近代化以後、例えば、大学に行かない人でも福沢諭吉の本を読む。教養を大切に生活の中に導こうとする「学志」が社会の特徴としてあったのではないかと思います。私は農村の人間ですが、農村でもちゃんと勉強している人がいるわけですね。お医者様とかお坊さんとか、地主さんのぼっちゃんなど。そういう特徴は現在でも続いていますね。大学の中では研究は行なわれているし、社会に出てからも学問への志を持っている人は存在している…例えば、この前、亡くなった元日銀理事の吉野俊彦さんは学問研究的な側面が非常にはっきりしている人ですね（編集部註：吉野氏はエコノミストとしての著書多数。森鷗外研究でも知られている）。私は、今でもああいう人が銀行にたくさんいると思うんです。だから、「社会にいる知識人」に文学を読んでもらいたい。「文学の言葉」は外国人と深く理解し合うための共通の武器になると私は信じているんです。

古田 「文学の言葉」が有用なのは文学者だけではないんですね。

大江 私はそう思うんです。アマーティア・センさんと私は往復書簡を公表しましたが、私が手紙の中に引用したのは先ほど挙げたエリオットの『Four Quartets』で



した。センさんの解釈に私は疑問があるんですが(笑)、それはそれとして、彼とエリオットについて話すことがどんなに私をセンさんに近づけたか。それで「こういう言葉の感覚の人だったら著書を読んでも解るだろう」と思ってセンさんの本を読み始めたわけです。センさんの本も3年間、読んだんです。数学的な部分はむりですが、思考の大筋は理解できるし、言葉の感覚が文学的なんです。センさんのお父さんがタゴール(編集部駐:ラビンドラナー・タゴール。インドの著名な詩人であり、思想家。アジア初のノーベル賞受賞者)の作った学園の教師だったということもありますよね。

大企業の働き手も官僚も政治家も、共通の言葉を持っていたら、お互いの間に質の高いコミュニケーションがあり得る。その共通の言葉は「文学の言葉」だと私は考えているんです。私は大江健三郎賞というのを作って、みんなから笑われているんですが、賞を作った目的はそこにあるんです。「実学」と「虚学的な場面から学びとったもの」が一人の人間の中ではっきり結び合った人間が私の理想の人間像です。そういう人が社会に向かって発言するようになった時、彼は「知識人」と言われると私は考えています。

古田 大学にいますと実感として「読むこと」が非常に大切だと感じます。ですから「どうしたら学生が本を読んでもくれるか」で四苦八苦しております、2004年3月に『教

養のためのブックガイド』(東京大学出版会刊)という本を出しました。「こんなものを出すのはやめておけ」という議論もあったんですが(笑)、教養学部の人間が中心になって作ったんです。お蔭様で一般の書店では結構注目されているらしいんですが、肝心の、大江先生がかつて『エリオット』を買われた駒場の生協や本郷の生協では学生への売上が今ひとつで期待したほどではないようです(笑)。

専門分化と教養教育

大江 学生諸君や若い人達の中に「反教養主義」というものがあるんですか？

古田 学生がなかなか本を読まないということもありますが、やはり、大学全体の大きな問題のひとつは「専門分化」でしょうか。狭い分野の専門家になってしまって異分野の専門家と言葉が通じないという状況があります。優秀であればこそ、狭いところに入り込んでしまうわけですが、小宮山総長が入学式で言われた「他者を感じる力」という言葉は「全体性を回復しなければ」という危機意識から出てきたのではないかという気がするんです。

大江 私は優秀な人達が専門的に細分化した深みに入って行くのはいいことだと思うんです。それがなければ、世界的な科学の進歩に追いついていけないでしょう。小宮山総長のおっしゃる「先頭を走る

人」が必要なわけですね。ですから、狭いところに入ること、自分を専門家として磨くことは、東大が学生に求めることの中で当然重要なことでしょう。狭いところに入って行く人は少数派であって、その中の天才が科学の発明などをするんだ、と。

古田 細分化したところに入って行った人々の中に基礎としての「教養」があるかどうかの問題なんですね。

大江 そちらから言えば、まさに。大学は違った分野の人間と言葉を共有する訓練をするのにいいところですよ。私は駒場の教養課程では理科の科目に地学をとってじつに面白かった。しかも理科系の人達と話したことが「科学をやる人間への信頼」を私に与えました。今でも信頼しています。その経験から、教養学部で理科系の人と文科系の人とに友情が生ずればそれは強い有効な絆になると思うんですね。それを祈っています。

この前、ドイツで私の翻訳のリーディング即売会をやってきましたんですが、私の小説のリーディングにたくさんの方が来てくださったわけですね。10カ所で2400人くらい。本も700冊以上売れたんです。それを目の当たりにして「ドイツにはなお本を読む人達の厚い層がある」と思いました。今度、フランスでも同じことをしますが、同じ反応があるんじゃないでしょうか。かつて日本にも教養主義の伝統があって「本を読む厚い層」が存在してしまし



少数の学生しかいなくても高い教育が行なわれている場所があるということが大学のひとつの側面でしょう。それは世界的に普遍なものです。

— 大江 —

た。そんな日本の教養主義の伝統が生き返ってほしいと私は思うんです。

私達の頃のフランス文学のクラスは40人もいたのに今は少ないらしい。それはそれでいいと思います。大学以外の場所でいくらかでもフランス語を学べる時代ですから狭いものとしてフランス文学を学ぶ人達はむしろ少なくない。しかし、法人化した大学が「フランス語をやる人が少ないから規模を小さくして先生方もリストラしよう」なんていうことがあれば私は反対なんです。少数の学生しかいなくても高い教育が行われている場所があるということが大学のひとつの側面でしょう。それは世界的に普遍なものです。法人化しても、東大はあまり流行らない学部を金を投じることが大切だと私は思うんです。

「知る」「解る」から「さとり」へ

古田 2006年度には、高校まで新しい学習指導要領で学んだ学生が入学してくるものですから、それを意識して、現在、カリキュラム改革の準備をしています。そこで「教養課程で2カ国語を学ぶ形を続けるか否か」という問題がありまして。特に理科は高校までに勉強する量が減ってしまったので、それを大学で補わなければならない。当然、その分、教養課程での理科の必修が増える。ですから、今は第二外国語を初修外国語と呼んでいるんです

が、「理科系の初修外国語をどうしようか」という議論をしました。すると、理科系の学部長から「ぜひ本学では2カ国語を学ぶスタイルを続けてほしい」という、教養学部の立場から言えば心強いサポートがありました。「理科系の人間が将来、仕事で外国に行った場合、現地の言葉をマスターできるかどうか重要な意味を持つ。だから駒場での初修外国語の勉強で語学を体系的に学ぶ方法を知ることには大きな意味がある」とのことでした。それで、本学では理系でも2カ国語履修体制を崩さない流れになっています。そんな状況を幸いに、私は「文科三類は英語以外にアジア系言語とヨーロッパ系言語、計3カ国語を必修にしたらどうか」と提案したんです。いきなりそこまで行くのは早急かもしれませんが(笑)。

大江 外国語を知っていることは、生きていくうえで、ものを考えるうえで、とにかく便利だと思うんです。英語で言われたことがどうしても日本語としてうまく入ってこない時に、フランス語と英語の間を繋いでみると「こういう言葉か」と解る場合がある。私は日本語を書きながら、いつもフランス語と英語の光が差してくるところで、仕事をしてきた。それが私の文学のやり方なんです。だから外国語の引用ばかりではないかという悪い評判もあるんですが(笑)。

古田 私も「外国語をマスターすることは

教養の面でも実学の面でも有用なことだ」と思っております。

大江 この前、高等学校に行って講演をしたんですが、事前にその女子生徒の方から『「知る」ための話ではなくて、『解る』ための話をしてくれ』という手紙が来たんです。それで、私は今まで「知る」と「解る」をどのように区別して生きてきたかを考えてみたわけなんです。まず、私は柳田国男全集の索引を眺めました。索引を見て「知るについて、日本人はどう考えてきたか」という柳田の文章があれば、学生諸君にそれを教えるのが一番いいと思ったからです。ところが、索引に「尻」のつく項目はいくらでもあるんですが、「知る」はないんです。「解る」も調べたんですが、「若」はあるのに「わかる」はないんです。そこで私が考えたのは、柳田が言っている「学ぶ」と「覚える」の違いです。「学ぶ」というのは「まねぶ」から来ているから、先生の真似をして教わることだ、と。それが本当に自分のものとなって「覚える」となる。自転車に乗ることを覚えた人は一生忘れない。すなわち、「学ぶ」と「覚える」の違いは「一方的に与えられた知識が自分のものになっていく過程」と「自分のものとなったものを実用化できる過程」だろうと私は結論づけたわけです。柳田は「覚える」の次は「さとり」だと言っています。実際にそれを使っているうちに、学びもしないし、覚えてもいない新しいことが浮かんでくることを「さとり」とい



うんだと。そこで、私は「知る」「解る」の上の段階もやはり「さとる」だと思ったんです。そのことを講演会でお話したんですが、反響はなかった。「さとる」が古かったか(笑)。

大学教育は基本的に「学ぶ」わけですね。先生の真似をして学ぶ。それから、特に英語やフランス語をうまく使える人達は「覚える」。その先にある「さとる」に自発的に自分の考えを作り出す行為がある。すなわちrepresentすること。表現し、代弁し、

かつ主張すること。学ぶ、覚える、そして、さとる。この「さとる」の段階が、みんなと一緒に社会に対して発言できる「知識人」になることではないかと思うんです。

駒場にいた時に教わったことが今でも自分のものの考え方、生き方の基本であると最初に申し上げました。現代のようにrepresentationが多様化している時代に自分の考え方や生き方の根幹になる数少ない発見を大学の1、2年でしてほしい。それはどんな方向に行っても、どんな狭い研

究についても役に立つものではないか、と思っています。

古田 ありがとうございます。最後はまとめていただいた感じですが……教養教育、そして教養学部の存在意義についてお話をしていただきまして、教養学部の教師としては非常に感謝しております。本日はお忙しい中、ありがとうございました。

<2005年11月10日、本学駒場キャンパス内フ
ァカルティクラブ橄欖にて>

大江健三郎 略歴

- 1935年 愛媛県に生まれる。
- 1954年 本学文科二類に入学。
- 1956年 フランス文学科に進み、渡辺一夫博士に師事。
- 1957年 東京大学新聞に掲載された『奇妙な仕事』で学生作家としてデビュー。
- 1958年 『飼育』により芥川賞受賞。短編集『見るまゑに跳べ』刊行。
- 1959年 本学フランス文学科卒業。
- 1964年 『個人的な体験』により新潮社文学賞受賞。
- 1967年 『万延元年のフットボール』により谷崎潤一郎賞受賞。
- 1969年 『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』刊行。
- 1973年 書き下ろし長編『洪水は我が魂に及び』により野間文芸賞受賞。
- 1984年 講演集『日本現代のユマニスト 渡辺一夫を読む』刊行。
- 1994年 ノーベル文学賞受賞。
- 1995年 ノーベル賞記念講演『あいまいな日本の私』刊行。
- 1996年 米プリンストン大学の客員講師に。
- 1999年 ベルリン自由大学客員教授に。「日本作家の現実」というテーマで講義。
- 2000年 米ハーバード大から名誉文学博士号を授与される。
ノーベル経済学賞受賞者アマーティア・セン教授との往復書簡。
- 2001年 朝日新聞夕刊紙上にN・チョムスキー氏との往復書簡掲載。
- 2002年 朝日新聞夕刊紙上にE・W・サイード氏との往復書簡掲載。
- 2004年 「九条の会」の集まりにて沖縄などで講演。
- 2005年 「大江健三郎賞」創設。『さようなら、私の本よ!』刊行。

[特 集]

卒業生 — こころざし それぞれの志を胸に —

開学以来、幾多の卒業生を世に送り出してきた東京大学。
その活躍分野は実に多岐にわたっています。
今号は特集テーマを「卒業生」とし、それぞれの現在をご紹介します。



野口聡一氏 東大帰還挨拶

皆さん、こんにちは！ 宇宙飛行士の野口聡一です。今日は久しぶりにキャンパスに帰って来られてうれしいです。久しぶりにこのキャンパスを歩いて「とても美しい大学だな」とあらためて思いました。毎日、キャンパスを見ている人たちはそう思わないだろうけれど、皆さんは良い環境で学生生活を送れて、とても恵まれていると思います。おかげさまで、15日間の宇宙の旅を終えて、ここに帰ってくることができ、うれしく思っています。先ほど、私と一緒に地球の周りを回っていた大学応援旗を総長に無事、お返ししました。この旗をいろいろなイベントに生かしていただいて、ぜひ、東大の名が、世界だけではなくて宇宙に届くように、皆さんも頑張ってください。今日は本当にどうもありがとう！

— 本学工学部広場にて

限りなき 天空への想い

野口聡一さん

2005年10月26日、野口聡一宇宙飛行士は母校、東京大学を訪問した。宇宙への旅に携えていった東大応援旗と航空宇宙工学専攻ロゴを返還し、多くの学生達に迎えられてのパレード。工学部広場に響き渡った野口氏の挨拶は、集まった人々に大いなる感動を与え、イベントは最高

潮に達したのだった。

野口聡一氏は1965年、神奈川県横浜市生まれ。高校1年生の時、TVでスペースシャトル初飛行を見て宇宙飛行への興味が芽生え、後に立花隆氏の著書『宇宙からの帰還』との出会いにより、「将来は宇宙飛行士に」と決意。以後、宇宙への思いを内に秘めつつ人生を歩んでいくこととなる。本学大学院工学系研究科修士課程では航空宇宙工学専攻へ。卒業後はIHI（石川島播磨重工業）でファンエンジン開発に従事。95年に宇宙開発事業団（現・宇宙航空研究開発機構：JAXA）の宇宙飛行

士公募に合格した。98年にはガガーリン宇宙飛行士訓練センターで訓練に参加し、その後もNASAで訓練を続行。

2005年7月26日、スペースシャトルSTS-114ミッションのもと、野口聡一氏は宇宙へと旅立った。20年以上も秘め続けてきた夢をついに実現したのである。宇宙を飛び続けた15日間に野口宇宙飛行士は3回の船外活動に従事した。そして、無事、地球へ帰還。

母校訪問を終えた野口聡一氏はNASAへと戻り、現在も訓練を続けている。再び宇宙へ旅立つ日のために。



一部写真提供：NASA

大学院時代の恩師が語る 「素顔の野口聡一」

大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻
長島利夫教授



野口君は私が研究室を立ち上げた最初の頃の学生で仲間をまとめる中心的存在でした。あの頃の研究室の面々は皆、彼の素晴らしい性格やほとばしるような情熱を感じていたと思います。私がやり始めた研究の実験装置は駒場にあつて、彼は毎日、通って研究してい

ました。実験の手順もテキパキと考えてくれて卒論の学生の面倒見も良かったですよ。

当時、彼が宇宙飛行士を志望していることは知りませんでしたが、公募に合格した時に報告に来てくれて。卒業生はあまり研究室に来ないんですが、彼の場合はIHI時代にもよく顔を出していました。彼は「仲間」を大切にする人なんです。

土井さん、野口君、山崎さん……航空宇宙工学専攻から3人も宇宙飛行士が生まれるなんて予想していませんでした。今後もぜひ出てほしいと思いますよ。

宇宙の研究は複数の分野を統合していくもので、いわば日本の科学の「底力」を表す学問。技術立国の

証しです。本学航空宇宙工学専攻はその証しを世界に示していかなければならない。中国が有人飛行を成功させましたね。あれ以後、中国の技術力に対するイメージが一変しました。宇宙工学は世界にインパクトを与えるファクターを持っているんです。

人生においては「過去を振り返り、未来に創造的に生かすこと」が大切だと思います。野口君は子供の頃からの夢を思い出しながら努力を続けて公募にトライし、未来に向けて育とうとしてきた。今でも「火星まで行きたい」と言っている。そんな人間を世にたくさん送り出すことが日本を元気にする原動力になるし、世界への貢献につながると思います。（談）

無限なる自分への道程

藤田一照さん

藤田一照氏は禅僧の道へと進んだ人物。

飄々と語る藤田氏の言葉は「大学で学んだ教養を生かすことの大切さ」を
そして、「既存の枠組みにとらわれない志を持つことの大切さ」を鮮やかに浮かび上がらせます。

10歳の体験から 「禅の世界」へ

10歳の時、一瞬にして世の中の景色が変わってしまう経験をしました。夜、自転車に乗っていて、何気なく空を見上げた瞬間にこう、感じたんです。

「無限に広がった真っ暗な宇宙の中に、ぼつんと生まれた小さな砂粒のような俺がいて、ここで空を見上げている……俺はたったひとりなんだ。この無限の宇宙の中で、いつか、消えてなくなる」。

その瞬間、今まで当たり前生きてきた「自分が存在する世界」が「ミステリー」

になりました。宇宙というわけの解らないところに、わけの解らないまま自分が存在している。このショックはずいぶん大きかった。心拍数が上がって自転車がころびそうになったくらいですから。思えば、僕の今までの人生はあの日の経験がずっと影響してきています。10歳のあの日から20代にかけて「何が問題なのかも解らない宿題を課された」という気分がずっと続いていて「とにかく宿題を解決しなければ」と思っていました。

大学院博士課程の頃に鎌倉円覚寺の「学生接心」に参加しました。接心というのは腹いっぱい坐禅する合宿修行です。

最初は脚が痛くてまともに坐禅が組みませんでした。でも暗い中で「痛い痛い」と坐っている時の気分が10歳の時のあの瞬間に似ていたんです。「禅ならあの時に感じた問題に答えてくれるかも知れない」と思いました。その後、いろいろ悩んだあげく「禅を本格的にやろう」と決心し、大学院に退学届けを出したんです。

得度、そして、渡米

大学院を辞めた後は兵庫県の山奥にある安泰寺へ。自給自足の農業をやりながら坐禅をやる寺です。そこで、29歳の時に



僧侶になりました。安泰寺ではお金がなくとも動じない心構えができましたね。貧乏な寺で、節約のために廊下の電球を抜いたりしていましたよ。

6年目に師から「アメリカにある坐禅堂へ行って見ないか」と言われて、僕は即座に「行きます」と答えました。行こうと思った最大の理由は「自分がやっている禅が世界で通用するかどうか」を確かめたかったからです。33歳で渡米したんですが、僕が行った禅堂はマサチューセッツ州のパイオニア・ヴァレー禅堂と言います。建物は寺というより手作りの小屋。北海道みたいに寒い所ですね。お茶の箱をくり抜い

た御喜捨箱を置いていましたが、それだけでは生活できないのでアルバイトをして。ハンディ・モンク（便利屋坊主）と呼ばれる何でも屋です。大工の手伝いとかベビーシッターとか。

あの近辺は仏教への関心が高い地域なので、3つの大学で週1回の坐禅会もずっとやりました。だから、アメリカで延べ何千人もの人に坐禅の仕方を教えたことになります。そういうことを通して「禅はユニバーサルなものだ」と確信しましたね。同じ人間の身体で坐るわけですから。それから、アメリカでは「坐禅にどういう意味があるのか」を明確に伝えなければならなかったの

で非常に勉強になりました。禅の世界では「真実は語れない」とよく言われるけれど「僕はどこまで語れるかを試そう」と思ったわけです。「自分が社会に貢献できるとしたら、これかな」と思っていました。

2003年、日本の友人が「葉山に茅山荘（ちざんそう）という場所があるんだが、管理人のような形で住み込んでアメリカでやっていることを日本でやってみたら」と誘ってくれて、2004年3月に帰国。結局、ヴァレー禅堂には17年半滞在したことになります。現在、僕と家族が住んでいるこの茅山荘は大正時代の実業家の別荘だった建物。広い敷地内には川が流れ、茅葺の古民家、



東屋、観音堂があります。

日常意識の剥がれた光景

現在、10歳の時に感じたあの「違和感」は薄れています。あの時に感じた感覚は、たとえばあたりまえにコップだと思っていた物が、突然コップでなくなるような感覚。コップに「コップ」という日常意識を被せているけれど、たまに「被せている意識」が剥がれて、それがなにか謎めいたものになるのです。当時の僕にはショックでしたが、実はよく起きていることなんですね。禅をやるそれがよく解るので「日常意識の剥が

れた光景」を見慣れてくる。だから「本来の風景は意識の剥がれた状態であって、意識を被せてしまうことのほうが問題なのではないか」と感じるようになった。10歳の経験は「困った問題」ではなくなったわけです。現在は脳科学、認知科学、生理学など何でも借りてきて「坐禅中に何が起きているか」をいろいろな角度から深く解明したいと思っています。それと「臨床的仏教」を追求したい。「ありがたいお話」ではなく日常生活に適用するものとして仏教を現出させたい。仏教を「わざ化」するということですね。

僕にとって大学・大学院で培った教養

は「批判力」となっています。お釈迦様は「私の言葉を『偉い人の言葉だ』と思って鵜呑みにするな」と言いますが、それは科学的態度であり批判的精神です。大学の良い点は、疑うことが尊重されていること。草創期の禅も批判的精神がみなぎっていますよ。僕は新しい視野が開けていく感覚が好きなんです。世界が今までとは違って見えてくることの快感。その意味で、東大は非常に良い環境でした。

目標を定めない志を携えて

禅僧は「自分の人生を創造していく人」。



「特集」卒業生 — それぞれの志を胸に —



他人が何と言おうと自分にしか辿れない軌道を描いていくことこそが僕の「志」だと思っています。きっちり目標を定めてそれをクリアする「志」はゴールテープを切るのが目的となりますが、「目標を決めない志」もあると思うんです。方向感覚だけを頼りに探りながら進んでいく。僧侶になったのは意外な展開でしたが、今から考えると僕はある方向感覚に導かれていた気がします。10歳の時に体験した感覚を大切にできる生活を具現化したいという志が通奏低音のようにずっとありました。

「無限に広がった真っ暗な宇宙の中に、ぼつんと生まれた小さな砂粒のような俺が

いて、ここで空を見上げている……俺はたったひとりなんだ。この無限の宇宙の中で、いつか、消えてなくなる」。

底なしの寂寥感もあるけれど、開放されたさわやかな思いもあって、なんとなく嬉しいことでもある。今でもその感覚の周りを回り続けている気がします。

仏教には「どこに行っても、自己を体験するだけだ」という言葉があります。

「火星に行こうが、銀河系外に行こうが、自己を体験しているだけだ。じゃあ、その自己とは何だ?」という問いかけ……それは、僕にとって志を託すに足るテーマだと確信しているんです。(談)

PROFILE

藤田一照 (ふじた・いっしょう)

1954年愛媛県新居浜市生まれ。灘高校から本学教育学部教育心理学科を経て、大学院で発達心理学を専攻。合気道部主将。28歳で博士課程を中退し、29歳で得度。33歳で渡米。2005年3月に帰国。現在、神奈川県葉山町在住。著作に『アメリカ禅堂通信』『ヴァレー禅堂雑想録』『私の坐禅参究帳』(いずれも月刊『大法輪』大法輪閣刊に連載)、訳書に『禅への鍵』(春秋社刊)、『ダルマの実践』、『フィーリング・ブッダ』(ともに四季社刊)がある。

ホームカミングデイ開催される

～東京大学卒業生室～

さまざまな場で活躍される東京大学の卒業生がキャンパスに集い、歴史と伝統を回顧し、まさに東京大学の「今」を感じ、将来への思いを重ね合わせる。東京大学は、ホームカミングデイを通じ、こうした機会をととても気軽な形で提供していきたいと考えています。

第4回ホームカミングデイ

本年度のホームカミングデイは、去る11月19日（土）、素晴らしい晴天に恵まれた本郷・駒場両キャンパスにて開催されました。当日は、風もかなり冷たく感じられる陽気でしたが、両会場を合わせて3000名を超える方がご来場されました。

来場された卒業生の方々は、思い思いに一日を過ごされました。

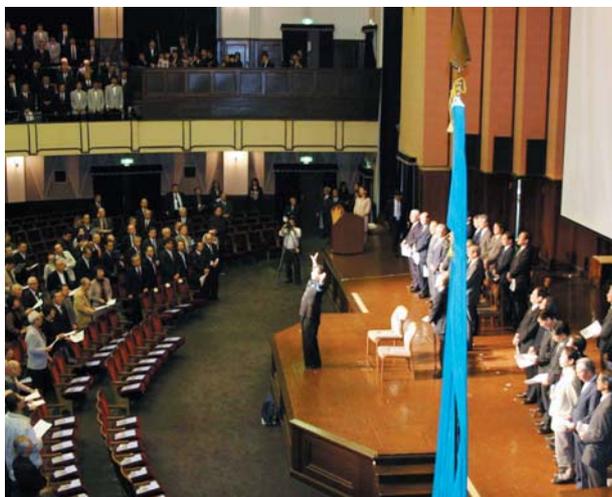
……キャンパスマップを片手に、昔懐かしい赤門、安田講堂、三四郎池を散策する。近年誕生した数々の建物に大学の進化のスピードを体感する。なかなか入る機会の少なかった総合研究博物館、史料編纂所などを訪れ、大学の幅広さ、奥深さをあらためて実感する。日本家屋「懐徳館」に足を踏み入れ、キャンパスにこんなところがあったのかと思わず驚嘆する。特別鼎談、落語、サッカーなど各種イベントに参加する。そして夕刻には卒業した各学部・学科の懇親会へ……

そんなホームカミングデイのイベントの一部をご紹介します。

大講堂における記念式典

昨年に引き続き渡辺あゆみ氏（教養学部卒業）の司会により始まった式典では、小宮山総長より、東京大学を取り巻く環境、そして大学が目指す方向性についてメッセージがありました。さらに桐野理事・副学長より、卒業生とのコミュニケーションをより深めていくための取組みについて説明がありました。

式典の後半には、応援歌として50年以上も愛されてきた「ただ一つ」の作詞者大森幸男氏、作曲者山口琢磨氏が壇上に登場されました。おふたりはこれが初めてのご対面にも関わらず絶妙のコンビネーションで、数々のエピソードに会場は温かな笑いに包まれました。当時は折しも戦後復興の時期。戦地から戻った学生らが銀杏並木にあふれ返る光景を見て、彼らが、「ただ一つ」の東京大学が、これからの日本を作ってゆくのだ、という思いから作られたとのこと。会場の全員が立ち上がり、「ただ一つ」を斉唱した際には、中には涙を浮かべる卒業生の姿も見られました。



特別鼎談 日本映画の「現在・過去・未来」 ～国際的な観点から

特別鼎談は、映画監督吉田喜重氏（文学部卒業）、そして監督のよきパートナーであり映画女優の岡田茉莉子氏をお招きし、蓮實重彦元総長が進行役を務めました。「日本映画の現在・過去・未来」と題したこの鼎談では、多くの貴重な映像をまじえながら、国際的な観点から吉田監督作品の歴史や海外での評価などが語られました。監督は松竹に入社するとき、映画界が本当に自分に向いているのかと迷ったそうですが、当時の指導教官に「映画の世界が合わないと思ったら、いつでも大学に戻ってきなさい。いつでも門戸を開いています」と言われたとのエピソードに、当時の大学の寛容な雰囲気を懐かしく思い出された方も多かったのではないのでしょうか。舞台裏の秘話などもあり、2時間という時間が瞬く間に過ぎていくように感じられました。

懐徳館一般公開・現役学生による キャンパスツアー ほか

加賀前田家ゆかりの家屋であり、現在も東京大学の迎賓館として利用されている懐徳館の回廊そして庭園は、大変な賑わいとなりました。暖かくやさしい日差しが縁側を包み、まさに都会の喧騒を忘れさせてくれます。現役の茶道部員による茶会・喫茶サービスも好評で、孫のような学生のお手前に目を細める卒業生の姿が見られました。キャンパスツアーには若い世代の夫婦からお年を召した方まで400名を超える方が参加されました。現役学生の案内を聞くだけでなく、参加者同士で会話をしながら散策されていたことがとても印象的です。



駒場キャンパス

駒場キャンパスでは、木畑洋一教養学部長による挨拶と小島憲道副学部長による現状報告に続き、本郷からのインターネット中継が行われる一方、立花隆特任教授と黒田玲子教授による「科学と社会のよりよきコミュニケーション」と題した特別講演会が行われました。両氏の鋭い問題提起に、様々な年代の聴衆が熱心に耳を傾け、予定をオーバーして質疑も活発に行われました。また、梶幹男秩父演習林長と箸本春樹氏による「駒場の樹木をめぐる講演会」にも多くの方が集い、キャンパスの樹木を解説しながらネームプレートをつけるツアーが行われました。家族連れもまじえた和やかな雰囲気でも、ぜひ来年もこの企画を、という声があちこちから聞こえました。

ゆるやかなつながりを目指して

東京大学は2007年に130周年を迎えます。よき伝統が脈々と受け継がれ、守り続けられていること。一方で、新しい時代の先頭に立つとの気概と自覚を持ち、あらゆる面から生まれ変わりつつあること。そのような大学の両面を、このホームカミングデーを通じて感じとっていただけではないかと思えます。

2006年度は11月11日（土）に開催される予定です。20万人とも言われる卒業生の数からすれば、3000人という来場者数は決して多くはありません。まだまだ若い世代の卒業生の数も少なかったように感じられます。会場にいらした方々にお願いしたアンケートなども踏まえ、来年はより多くの方々に過ごしていただけるものにしていきたいと考えております。

小宮山総長の言葉にもあるように、解決すべき課題が山積みの「課題先進国」日本において、東京大学は世界に先駆けて様々な社会的課題に取り組んでいく必要があり、そのためには卒業生との連携が不可欠です。ホームカミングデーは、卒業生と大学が、ゆるやかに、しかししっかりと「つながっていく」ための基盤です。他の大学にはない「東大らしさ」をもっと多くの卒業生に、そして社会全体に伝えることができるように努力してまいります。

法科大学院（大学院法学政治学研究科法曹養成専攻）

School of Law

山下 友信 教授

<http://www.j.u-tokyo.ac.jp/>

法科大学院の新しい教育

法科大学院（法学政治学研究科法曹養成専攻）は2004年4月のスタートから2年近くを経て、2006年3月には第1回目の修了生を送り出します。今回は、法科大学院で新たに試みている教育の試み2つを紹介します。

法律実務基礎科目

法科大学院で行われている授業で、既存の学部や大学院では見られないのが、一連の法律実務基礎科目です。いずれも優れた裁判官、検事、弁護士、企業法務専門家を実務家教員として迎え、担当してもらっています。

今回は、「法曹倫理」の授業の様子を紹介します。この科目は、在学最終年次である3年次の冬学期の必修科目です。山室恵教授（元東京高裁判事）担当の11月21日の教室の様子をのぞいてみましょう。この日は、前半では、依頼者と弁護士の間で信頼関係が失われた場合に弁護士としてはどのように

行動すべきかという問題が扱われました。たとえば、依頼者が訴訟で虚偽の主張をしたり証拠を偽造していたことが明らかになった場合に、弁護士としては訴訟代理人を辞任してよいか、辞任してよとして後任の弁護士を推薦したり依頼する必要があるか、後任の弁護士に対して依頼者のした行為について告げることは許されるのか、というような問題が設定され、学生との対話をしながら授業が進んでいきます。最後の問題は、後半のテーマである弁護士の守秘義務の問題につながっていきます。弁護士が職務上知り得た依頼者の秘密については当然守秘義務の対象となりますが、正当な理由があれば守秘義務が解除されます。この正当な理由はどのような場合にありと認められるかが、様々な事例を素材としながら議論されていきます。学生はこのような授業を通じて、法曹としての心構えを学ぶとともに、自分で考え、自分の意見をまとめ、さらに他者と議論していく能力を身につけていくことになります。

サマースクール

法科大学院では国際的に活躍できる法曹を養成することを教育目標の一つに掲げていますが、そのために大きく力を注いでいるのが「サマースクール」です。サマースクールは、外国人を講師として迎え、合宿方式で短期集中的に英語による授業を実施するものです。2回目に当たる今年度は、2005年7月23日から28日まで、レイニア・クラークマン教授（ハーバード大学）ほか5名のアメリカ、ヨーロッパの研究者・実務家を講師に迎え、「会社法の現代的動向」というテーマで開催されました。受講者としては、本法科大学院生53名、若手弁護士や企業法務担当者9名のほか、初めての試みとしてソウル大学で商法を研究している大学院生3名も参加しました。学生にとっては、大変ハードなコースでしたが、世界最高峰の研究者・実務家によるコーポレート・ガバナンスや企業買収に関する最先端の理論と実務に関する講義はきわめて充実したものでした。



「法曹倫理」授業風景



「サマースクール」授業風景

生産技術研究所

Institute of Industrial Science

前田 正史 教授 (所長)

<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/>

大学における研究・教育は、未来への投資です。教育により大きな責任がある学部とともに、未来の価値を担保する存在である大学の研究所には、最先端の学術研究とその研究過程における大学院教育を担う大きな使命があります。生産技術研究所は、工学分野を主とした研究中心の大学院大学の典型として新制大学院設立以来、その責任を果たし、大きな成果を上げてきました。

生産技術研究所は、第二工学部の後継として1949年(昭和24年)に現在の千葉実験所のある千葉市弥生町に設立されました。糸川教授によるロケット研究はここでスタートしたものです。起源が工学部であるため、後に分離した航空宇宙部門をのぞいた幅広い工学分野を研究領域としています。現在でも設立跡地の一部を千葉実験所として活用し、おもに大型試験を行っています。その後、1962年(昭和37年)に移転した六本木キャンパスにおいて、都市型研究所として2001年(平成13年)まで活動してきました。さらに、同年に現在の駒場リサーチキャンパスへ移転して以来、はや5年が経過しています。現在、大学院学生約640名、教授、助教、講師など研究室を主宰する教員110名、そして研究・技術職員160名、事務管理職員60名を擁しています。生産技術研究所は、国立大学の法人化も含めた目まぐるしい変化のなかにおいて、極めて強力な所員とスタッフたちのもと、工学全般の研究・教育活動を行っている、大学に附置された研究所としては国内最大、おそらく世界でも大きな研究所の一つです。これまでの56年の歴史においても素晴らしい研究成果を社会に発信し、卓越した人材を輩出しています。

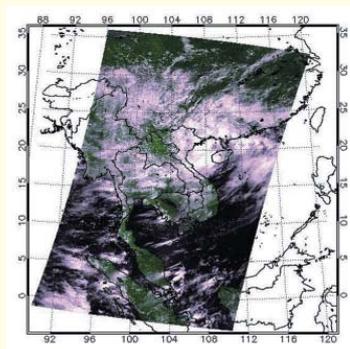
生産技術研究所においては、従来の講座制とは異なり、110名の各教員が、基礎から応用まで広範囲に渡るさまざまな工学分野において、各自の自由な判断によって研究テーマを選び、各自の手法を用いて研究室を主宰することにより研究活動を続けてい

ます。このような研究室制度が創造的な研究を産み出し育て上げるのに重要な役割を果たしています。また、専門分野の近い複数の研究室が自発的に協力しあうグループ研究活動も盛んに行われており、さらには研究成果を拡大・発展させるために、このような研究グループを組織化した研究センターや連携研究センターにおいて、当該分野の総合的な研究を推進しています。現在は、これらのセンターが核となり海外の研究機関と連携し、当該研究の世界的な研究拠点を狙ったグローバル連携研究拠点網の構築事業を推進しています。この事業のなかで、すでにパリとバンコクに拠点が設置されています。

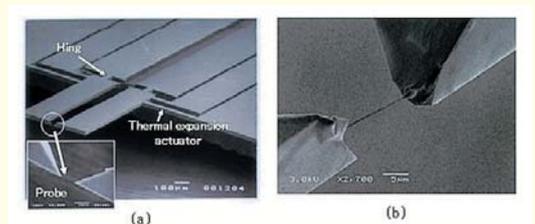
生産技術研究所の教育活動は、大学院教育では、大学院工学系研究科、理学系研究科、および学際情報学府と連携して、600名を超える大学院学生を受け入れると同時に大学院における講義や演習を担当し大学院教育に大きな貢献を果たしています。また、産業界の研究者や技術者に対する再教育にも積極的に取り組み、共同研究や受託研究を通じて80名ほどの第一線の企業研究者や

50名近い博士研究員が、最新の工学・理学についての勉学や研究を行っています。さらには、SNG(Scientists for the Next Generation!!)として、次世代を担う若い人にもっと科学に興味を持ってもらうために、中学・高校生のための東大生研公開、大学院生等による出張授業などのプロジェクトを行っています。この他にも、学部学生や一般の社会人を対象に公開講座として生研イブニングセミナーの実施、産業界の研究者や技術者を対象に生研基礎講座や生研セミナーの実施など、幅広いアウトリーチ活動を長年積極的に行っています。

生産技術研究所は、その名の通り近代産業を基盤とする文明の科学を研究する使命があります。すなわち、わが国として世界にどのような貢献ができるのかという観点から、持続可能な社会のため、工業化の社会基盤によって定義された生産科学の研究をすすめていきます。これにより、優秀な人材を社会に輩出すると同時に、知を創造し価値を創出するための未来への投資という大学の機能を発揮して、生産技術研究所は自らの使命を果たしていきます。



2001年より地球観測衛星TERRAに搭載されたセンサMODISのデータを東京(生産技術研究所)とバンコクにおいて受信し、東アジア、東南アジアのほぼ全域を毎日観測している。これらの画像データを基に、土地被覆分布や生物生産量分布など環境や災害に関する基盤情報を抽出する研究を行い、これらの成果をデータベース化して外部に公開している



先端が10nm級の曲率半径を持つ対向針の間に、誘電力を利用して水中のDNA分子を引き付けるDNA捕獲用ナノピンセットが作製されている。フランス科学研究センター-CNRSを中心とする海外との共同研究を核とし、国内の研究ネットワークと海外のネットワークとの連携により、マイクロ・ナノエレクトロニクスの研究を国際的レベルで推進している

運動器と運動の大切さを知る

—転倒予防から子どもへの教育まで—

武藤 芳照

大学院教育学研究科 教授 (身体教育学)


<http://www.p.u-tokyo.ac.jp/~muto/>

からだを動かす仕組みとしての「運動器」の構造と機能を適正に保ち、発達・向上させることが大切であること、及び一人ひとりの身体特性に即した運動が、性・年代を問わずそれぞれの健康と幸福にとって大切であることを研究すると共に、実践的・教育的活動を広げている。(本文へ続く)

高齢者の転倒・骨折・介護予防

少子高齢化が進む中、高齢者の要介護・寝たきりを予防することは、高齢者個人にとっても、その家族と地域社会、そして国家にとっても喫緊の課題である。とりわけ、転倒に伴う大腿骨頸部骨折を始めとする重篤な障害・事故を予防することは、介護予防の重要施策のひとつである。

高齢者の転倒をどうとらえるかが、転倒予防の鍵となる。国内外の先行研究及び我々のグループの研究結果等を総合して、「転倒は結果であり、原因でもある」という概念にたどりついた(図1)。加齢と運動不足による身体機能の低下、疾病、薬剤の服用等の内的要因が複合した結果、転びやすい状態を生み出す。つまり、ヒトが長い年月をかけて、進化の過程で獲得した直立二足歩行がしっかりとできなくなるような生体の調節機構の破綻の表象が、転倒とみなされる。そして、転倒を原因として、骨折、廃用症候群、閉じこもり、寝たきり等をきたす。

こうした概念形成から、高齢者の転倒を生活習慣病の一種とみなすとすれば、適正な運動・生活指導により、転倒を予防し、骨折を予防し、介護を予防し、一人ひとりの高齢者が健やかで実りある心豊かな日々を過ごすことができるであろう。そうした理論を根拠として、「転倒予防教室」の創設とその全国展開、指導者養成、研究会の設立、テントウになんで「転倒予防の日(10月10日)」の制定(図2)、「転倒予防電話相談119」の実施等の学術的・社会活動を推進している。

大人も知らないからだの本

身体教育学の基本理念は、
からだの理(ことわり)を知ること
からだ・健康・生命の大切さを知ること
からだを動かすことの楽しさと喜びと大切さを知ること
に集約される。

一方、スウェーデン・ルンド大学から始まり、国連、WHO(世界保健機関)が主導・支持する「運動器の10年」世界運動(2000~2010年)が現在展開されている。その日本での事業の一環として、身体教育学の立場から、運動器と運動の大切さを子どもたちに伝えるためのマンガ本を、教育学部学生(当時)7名と共に制作・編集した。

学校、家庭、スポーツ現場での重要な知見を、これまでの研究成果を基礎にして、わかりやすくマンガ形式で構成して、有効な教材としてまとめ上げるという仕事である。研究から子どもへの教育に結びつける重要な営みであったと認識している。

平成17(2005)年度秋の東京大学総長賞を当該学生らが受賞すると共に、一部英訳版(図3)を作成して、学生の代表に「運動器の10年」運動の世界会議(カナダ・オタワ)で公表してもらった。

究極・最良の介護予防は、元気な子どもたちをたくさん育てることと考えている。そのために、小学校段階から、運動器と運動の大切さを子どもたち自身にしっかり理解させ、身につけると共に、運動器の障害・事故の予防に結びつく教育が確立できるような基礎的研究と実践活動を積み重ねている。

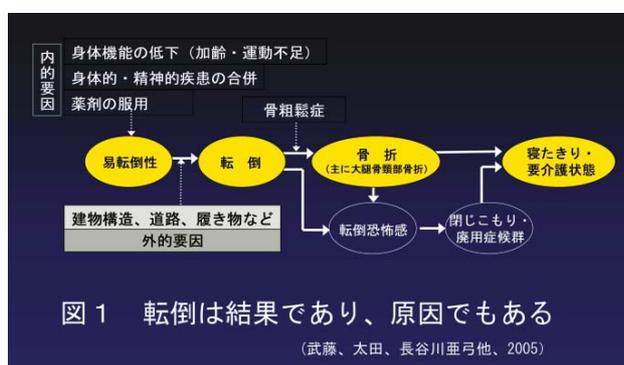


図2

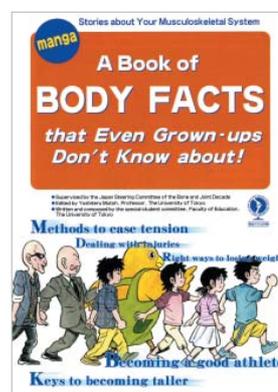


図3

バイオマスからの輸送用液体燃料製造

横山 伸也

大学院農学生命科学研究科 教授



<http://www.bme.en.a.u-tokyo.ac.jp/>

当研究室での研究の一分野は、バイオマス(一定量集積した材木、草、海藻、有機性廃棄物など植物起源の資源)のエネルギーシステムの解析である。バイオマスのエネルギー変換の重要なプロセスとして、輸送用の液体燃料製造に焦点を当てて研究を展開しているのでその背景を紹介する。(本文へ続く)

木材などのバイオマスを、燃焼して利用し最終的に大気中に二酸化炭素として放出しても、同量の二酸化炭素を再植林などにより光合成で固定する限り、大気中の二酸化炭素濃度には影響を与えない。この性質を称してカーボンニュートラルと呼んでいる。この循環の中から化石エネルギーに依存しないエネルギーが生産されるので、その分だけ化石資源由来の二酸化炭素を削減できることになる。バイオマスが他の再生可能エネルギーと比較してユニークなのは、バイオマスが有機性(炭素質)であることで、電気や熱以外に化学品や輸送用燃料を直接製造できることにある。

アジアでのエネルギー需給を見ると、経済発展に伴いエネルギー需要量が供給量を大幅に上回っている。注目すべきはこの地域で石油の輸入量が大幅に増加していることである。石油の消費量が2003年に10億410万トンに対して、純輸入量は6億5500万トンである。アジアの石油需給の推移を見ると、石油需要が1990年では6億1800万トンから年平均3.8%で増加し、2003年には10億410万トンに達している。中国では自転車に替わって自動車の普及が急速に進行していることは、改めて指摘することもないほどである。

このために石油需給の逼迫やコスト高が予想され、二酸化炭素の増大に伴う環境への悪影響が懸念されている。このような状況の下、バイオマスから石油代替燃料の製造が強く期待されている。図1はバイオマスの中でも木質系や草本系の廃棄物バイオマスから、液体燃料を製造したプロセスをまとめたものである。ガス化

して合成ガスからメタノール、DME(ディメチルエーテル)、FT(フィッシャー・トロプッシュ)法によりディーゼル代替燃料をつくるプロセスや、食糧と競合しないリグノセルロース物質を出発原料としてエタノールを製造するプロセスも有望である。石油価格が高騰していくことが予想されるが、未利用のバイオマスから石油代替燃料を製造する技術を確認することは、高騰化を続ける石油価格をヘッジする意味でも重要である。

我々は、食糧や付加価値の高いバイオマスではなく、未利用系や廃棄物系バイオマスに注目して、石油に代替する液体燃料を製造する最適プロセスの設計や二酸化炭素の削減効果、経済性、京都議定書に基づくCDM(クリーン開発メカニズム)の可能性を検討している。

資源エネルギー庁の調査によれば、アジア地域におけるバイオマス資源量は、林業系、農業系、畜産系の廃棄物バイオマスが49EJ(エクサジュール:10¹⁸ジュール)、エネルギー作物で38EJ、総量で87EJと推定されている。これは現在の世界の一次エネルギー消費量の約20%に相当する。

図2はパームヤシの実であるが、油を絞った後の空果房や廃幹(トランク)を対象としている。20年から25年で植え替えられる際にパームヤシの廃幹が排出され、マレーシアだけで乾燥重量で毎年500万トンにも達する。有効に利用されていない廃幹のようなバイオマスから、図1に示す方法で輸送用燃料を効率的に製造するプロセスを提案できればと願っている。

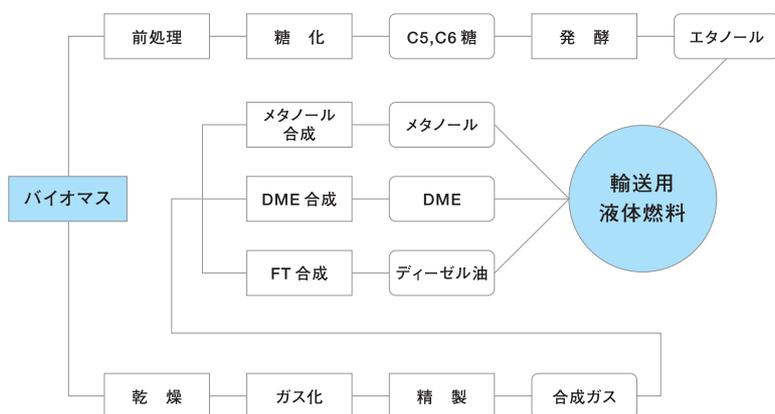


図2 パームヤシの実

図1 バイオマスから液体燃料製造のプロセス

北海文化研究常呂実習施設と「ところ遺跡の森構想」



宇田川洋

大学院人文社会系研究科 教授

人 文社会系研究科附属の唯一の施設である当施設は、北海道東部のオホーツク海とサロマ湖に面する常呂町に所在する教授・助手各1名の小さな研究機関である。1965年、常呂町が「常呂町郷土資料館」として現在の研究棟を建設し、そこを「常呂研究室」として東大に貸与したことにより、助手1名を考古学研究室から派遣したことからはじまった。1973年に実習施設として文部省認可となり、現在に至っている。当初は文学部のみならず、理系などの各研究室がそれぞれ研究棟や学生宿舎を持ち、常呂町を中心とした北方地域の研究を総合的に行おうと壮大な計画をもっていたが、大学紛争のため凍結されたままになってしまった。現在は主にオホーツク文化の考古学的研究が中心であるが、それはシベリア大陸などの北方交渉を解き明かす目的をもっている。それだけではなく、考古学研究室とも連携して、「中期計画・中期目標」に明記された「日本列島の北端と南端を視野に入れた原日本文化研究の推進」を実践する活動の拠点ともなっている。

実習施設が入っている研究棟はかなり老朽化が進んでいるが、発掘調査実習期間は学生・院生で賑わい、その他の期間も主に院生が整理作業や研究の場として利用している。彼らの宿泊用の古い学生宿舎(1968年竣工)は、六角形の2階建てのもので、現在は東大資料保存センターとして機能している。新学生宿舎は2003年に建てられたが、教員室2、学生室12とミーティングルーム他をもつ快適な空間を提供している。東大常呂資料陳列館は1967年に建てられた町の建物を借用しているが、4方向から見て同じ形態をとっているユニークなものである。資料保存センターとともに当時の施設部長の設計である。この資料陳列館は、1957年以来の発掘調査で得られた一級資料を含む専門的な考古資料を展示しているが、町の施設であるところ遺跡の館・ところ埋蔵文化財センターはむしろ一般市民や町民を対象としており、それぞれが役割分担して機能し

ている。

隣接するところ埋蔵文化財センター(1998年開館)は、考古資料の復元作業や実測作業などを見学でき、常呂町の貴重な文化遺産を後世に伝える拠点となっている。ところ遺跡の館(1993年開館)は堅穴住居をイメージして建てられたもので、町内の遺跡から出土した各文化のいろいろな遺物、住居模型、ジオラマなどを展示しており、オホーツク地域の古代文化の学習や体験などを行える事業を展開している。遺跡の館から埋蔵文化財センターまでのカシワやミズナラの自然林は、国史跡・常呂遺跡として約12ヘクタールが1990年に追加指定され、140軒ほどの集落が残されている。ここでは史跡整備事業を東大とともにやり、縄文の村には約4000年前の復元住居が1軒、続縄文の村には約1800年前のものが1軒、擦文の村には約1000年前のものが4軒復元されている。このような諸施設とそれを取り囲む形での体験学習の場を常呂町と東大が協力しあって、「ところ遺跡の森構想」として一般町民に公開し、活用をはかっているところである。

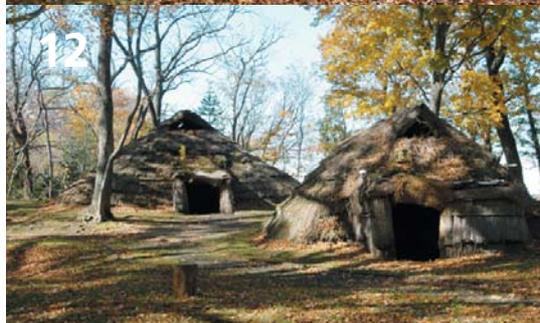
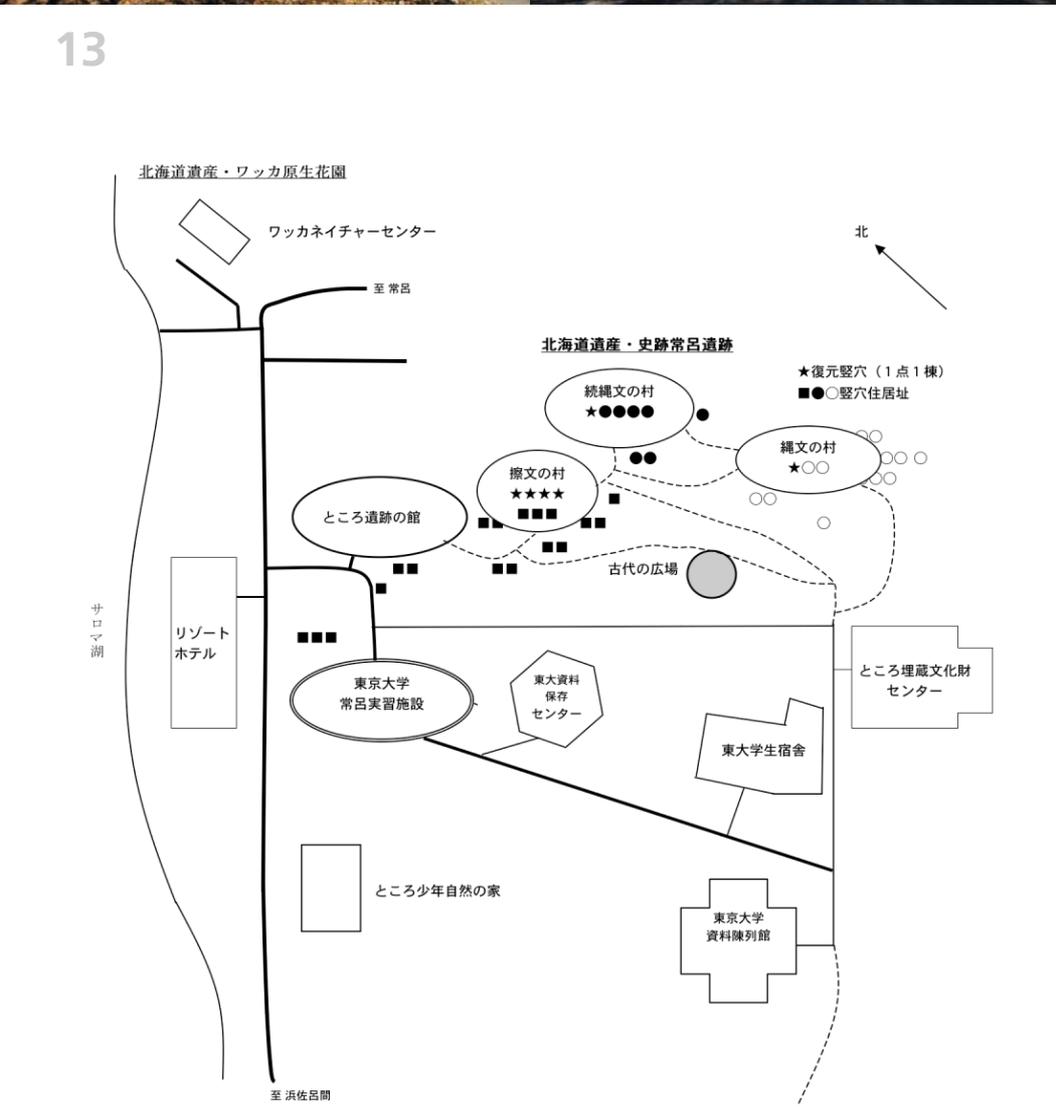
ところで、現在、東大は別の地区にある史跡・常呂遺跡の一部であるトコロチャシ跡遺跡を継続調査しているが、文部省科学研究費地域連携科学研究補助金の交付を受け(共同研究「常呂遺跡」の史跡整備に関する調査研究)研究代表者：宇田川洋、1999～2001年)、常呂町とタイアップして研究を継続してきた経緯がある。アイヌ期の18世紀頃のチャシ(壕などで一定空間を画した遺跡で、多くは砦として利用された)や10世紀頃のオホーツク文化期の集落と墓域の調査などを行い、それらの復元・公開を計画している。これが完成すると、常呂町での以上の施設を巡ることによって、北海道の古代の歴史を学習できることになり、北海道はもとより日本初の試みとして評価されることになる。

このような長年にわたる地域連携と独自の研究を通じて、当施設は機能を発展・継続させているが、2000年からは別の試みがスター

トした。常呂町内を会場にした東京大学文学部公開講座(通称ところ講座)の開催である。学部長や評議員の先生方も講師として講演されて、近隣の市町村からの聴講者も多く、好評を博してすでに9回を数えている。

以上のような「ところ遺跡の森構想」は、開かれた大学として、東大と町が一体となって展開しているもので、常呂町社会教育中期計画にもある町全体のエコミュージアム構想のひとつの核となるものと考えている。以上、施設の研究状況と運用のあり方、周辺の施設などの一端を紹介してみた。言ってみれば、「ところキャンパス」である。

- 01 1965年に町が建設してくれた現在の研究棟。右側面には白樺の半割材を貼り付けている。
- 02 オホーツク文化の堅穴をイメージした六角形の建物。旧学生宿舎であるが、現在は東大資料保存センター。
- 03 新学生宿舎。学内共同利用ができる宿舎。宿泊研修や研究会・会議等に利用が可能。
- 04 学生宿舎の教官室。パソコン対応。
- 05 学生宿舎のミーティングルーム。24人まで対応可能。
- 06 東大常呂資料陳列館。四面に白樺材を貼り付けた外装の考古博物館。
- 07 ところ埋蔵文化財センター。収蔵展示を含むセンター。広いロビーには遺物や模型の展示、樺太アイヌ文化の紹介もある。
- 08 ところ遺跡の館。堅穴をイメージした円形の建物。遺跡の森への導入口となっている。
- 09 ところ遺跡の館の内部のジオラマ。
- 10 ところ遺跡の館の内部展示の様子。
- 11 ところ遺跡の森の中。10世紀頃の擦文時代の堅穴住居跡が今なお窺って見える。
- 12 擦文の村の復元住居。宿泊体験も可能である。
- 13 ところ遺跡の森構想と施設の位置。
- 14 2005年9月に常呂町中央公民館で開催された第9回東大文学部公開講座。受講者には学部長の修了証書が手渡される。



学術俯瞰講義を開講

本学の学部前期課程教育では、平成17年度冬学期から「学術俯瞰講義」が開講されています。この学術俯瞰講義は、小宮山総長の発案により本年度から創設された授業科目です。今日の学術は加速度的かつダイナミックに進展していますが、その結果として、ひとつひとつの先端学問分野が他の分野とどう繋がり、より広い学問領域の中でどのような位置にあるのかを把握することが難しくなっています。そのような背景のもと、学術俯瞰講義は大学に入学してきたばかりの1、2年生に「知」の大きな体系や構造を見せることにより、自らが現在学んでいる授業科目の意義や位置付けを認識させ、将来への展望を与えることによって学びへの動機を高めることを目的としています。

先頃まで開講されていた学術俯瞰講義の第一弾「物質の科学」では、われわれの身の回りの全ての現象・事柄の根源にある「物質」をキーワードとして、物質の起源を探る学問

分野、物質の性質を明らかにする学問分野、物質を工学的に利用する学問分野を繋いで、「物質の科学」を貫く学術全体の流れを解説しました。小柴昌俊特別栄誉教授(ノーベル物理学賞)、佐藤勝彦教授(理学系研究科)、家 泰弘教授(物性研究所)、小宮山宏総長の4名を講師陣に迎え、各講師がサブテーマ「物質はどのように創られたのか」(第1回)、「物質の生い立ち 素粒子、原子、宇



教養学部900番教室から見た双方向テレビ中継

宙一」(第2～5回)、「物質の性質」(第6～9回)、「物質を作り使う」(第10～13回)を担当し、10月17日～1月30日の月曜日6時限(18:00～19:30)に駒場Iキャンパス数理科学研究科大講義室で計13回開講されました。

なお、本講義は、本学の全学教育事業の一環としてUT OCW(東京大学オープンコースウェア <http://ocw.u-tokyo.ac.jp/>)等を利用した電子メディアでの公開を予定しています。



本講義のポスター

全国各地で大学説明会を開催

東京大学では、130年の歴史の中ではじめて、受験生向けの主要大学説明会を開催しました。この説明会は全国6ヵ所(札幌、福岡、仙台、大阪、名古屋、東京)で9月24日から10月29日の間に実施し、本学の他に、北海道大学、東京工業大学、一橋大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学、慶應義塾大学、早稲田大学等が参加をしました。各会場では、受験生やその父母、教育関係者が多数参加し、入学者選抜方法等について熱心な質問が寄せられました。新聞社・テレビ等メディアの取材も多数ありました。

小宮山宏総長は、未来のWorld Top Runnerになる人を育成するべく、「本質を捉える力・先頭に立つ勇氣・他者を感じる力」をスローガンとして掲げています。これを実現するために、受験生がブランド・偏差値だけで大学を選択するのではなく、真に学びたい分野を理解し、大学・学部を決める一助としてもらいたい、全国主要大学を「遠い存在」から具体的目標に意識を向上させ、「近い存在」として理解してもらいたい、というコンセプトで説明会を開催しました。

説明会では基調講演、大学説明及び、個

別相談など豊富なプログラムが実施され、4400人も参加者が会場を訪れました。基調講演では、トップレベルの教員による「学問のおもしろさ、素晴らしさ」をテーマとする講義を通して大学からのメッセージを伝え、全体説明では各大学が大学紹介や入試方法など具体的な説明を行いました。個別ブースでは、受験生一人一人の質問にスタッフが丁寧に対応しました。全体的に入試方法、進学振分け、学寮、学生宿舎、海外留学に対して受験生の関心が高く質問が集中していました。



参加者に対して自らの経験を交えながら熱くメッセージを送る古田副学長



小宮山総長のビデオメッセージを紹介しながら平成18年度入試について語りかける入試課長



熱心な質問をする参加者に対して親身に回答する入試課スタッフ一同

太平洋戦争中に援農学生として受け入れてくれた平岡村を訪問

2005年7月10日(日)、大学院経済学研究科・経済学部 神野直彦研究科長(当時)、伊藤正直・伊藤元重両副研究科長の3名が平岡村(現在は千葉県袖ヶ浦市内)を訪問し、太平洋戦争中に援農学生として経済学部の学生を受け入れてくださった地域の方々から当時のお話を聞きながら村内ゆかりの地を回りました。

当時、東京大学の学生、とりわけ経済学部など文科系の学生はその大多数が戦地へ送られました。そして、かなりの数の学生が特攻隊などに送られ命を失いました。そうした中で当時の経済学部長は「援農」という学徒勤労動員の形で学生を千葉県の平岡村に送り出したのです。学部長には学生を徴兵から救いたいという思いがあったのでしょう。また、ひょっとしたらすでに日本が戦争に負けることを予想し、戦後日本を復興させるために優秀な人材を残しておきたいという願いもあったのかもしれません。平岡村の方々もこれらの学生を暖かく迎え入れてくださいました。平岡村へ行った100名前後と推測さ

れる学生はこの措置によって命を救われる結果になったのです。当時の学生達は戦後60年たった今でも平岡村と交流を続けており、今回は経済学部としても正式に平岡村を訪問させていただくことになりました。現地では、当時のことを知っている平岡村関係者の方々が何人かお待ちくださっており、いっしょに村内を回ってお話を聞かせてくださいました。

平岡村では、学生達が寝泊まりした住宅、農作業をしていた場所、当時学生達が使用するために持ち込んだ食器などを見せてい

ただきました。かなり広い範囲の村内を移動しながら当時の生活のお話を伺っていると、戦争当時の援農活動で当地に滞在していた学生達の生活が思い浮かぶようです。写真は現在でも残っている当時の食器の一部ですが、この写真には「経済学部」という焼き印も写っています。こうした物を大切に保管して下さっていた平岡村の方々に深く感謝したいと思います。もう1枚の写真は援農の学生と地元の方が当時いっしょに撮影したものです。



「東京大学稷門賞」授賞式行われる

平成17年度前期「東京大学稷門賞」の受賞者が右記のとおり、安田弘様及び東京電力株式会社様に決定し、11月8日(火)午後5時30分から武田先端知ビル武田ホールにおいて、授賞式が行われました。

本表彰は、私財の寄付、ボランティア活動及び援助等により、本学の活動の発展に大きく貢献した個人、法人又は団体(現に在籍する本学の教職員及び学生は原則として対象外)に対し授与するもので、前期、後期の年2回実施しています。

授賞式においては、選考結果の報告、各受賞者への表彰状及び記念品の贈呈があり、その後、総長の挨拶、受賞者からの挨拶がありました。

また、授賞式に引き続き、同ビルホワイエにおいてレセプションが行われ、受賞関係者と本学関係者との懇談が和やかな雰囲気の中で行われました。

受賞者

1 安田 弘 様

授賞理由：東洋文化研究所に安田弘氏の祖父である安田善次郎氏が収集した「安田文庫」旧蔵の『正平版論語』等重要文化財級の貴重古典籍11点の寄贈。

2 東京電力株式会社

取締役社長 勝俣 恒久 様

授賞理由：大学院工学系研究科にエネルギー

ーの供給から利用にわたる工学研究分野において継続的に寄付講座(エネルギー極限工学寄付講座-平成2~6年度-、極限環境材料構造信頼性工学寄付講座-平成9~13年度-、建築環境エネルギー計画学寄付講座-平成16~19年度-)の設置支援を受け、エネルギー問題に関する本学の様々な研究分野の発展に寄与し、同研究科の研究教育活動に大きく貢献。



UT Forum学生フォーラム開催される

東京大学は、2005年4月28日(木)～29日(祝)に、中国北京市においてUT Forum(中国学系、材料学系、医科学系の三分野)を、北京大学、清華大学、中国科学院で開催しました。当初、同時期にUT Forum学生フォーラムを合わせて開催する予定でしたが、残念ながら中国情勢により延期しました。そのUT Forum学生フォーラム(中国学系、材料学系、医科学系の3分野)を今夏から秋にかけて、北京大学、清華大学、中国科学院の大学院生を招待して東京大学にて開催しました。

まず、8月8日(月)に文学部にて、中国学系学生フォーラムを開催し、人文社会系ならびに総合文化研究科の学生が北京大学から招いた劉教授及び同大学生12名と共に研究の報告を行いました。次に、9月26日(月)には工学部にて、材料学系学生フォーラムを開催し、工学系、新領域創成科学、情報理工研究科の学生が清華大学から招いた潘教授と同大学生12名と共に研究の報告を行いました。最後に、9月2日(木)、30日(金)に医科学研究所にて、医科学系学生フォーラムを開催し、医学系研究科の学

生が中国科学院から招いた呂同研究生院副院長他と学生14名と共に研究の報告を行いました。

いずれのフォーラムにおいても活発な質疑応答が行われるなど学問上の交流がなされたことは言うに及ばず、フォーラム前後に行った見学旅行や懇親会等、学問を離れたところでも、和やかな雰囲気の中お互いの親睦を深めました。両国の学生フォーラム参加者が、研究活動をはじめとし、今後日中交流の要となって活躍してくれることと期待します。



RoboTech、国際ロボコンで優勝

工学部丁友会学生サークルRoboTechが、第4回ABUアジア・太平洋ロボットコンテストに出場し、日本代表としては初めての優勝を飾りました。また、これに先立ち、日本代表選考会を兼ねたNHK大学ロボコンでは、2年連続優勝を果たしました。

この国際大会は、ABU(Asia-Pacific Broadcasting Union)が主催し、アジア太平洋地域の19カ国945チーム、1万人以上の参加者の中から、各国内大会で優勝した代表20チームが集い、2005年8月27日(土)に北京で開催されました。どのチームも気迫に満ちた取り組みで、まさに優秀な高い完成度を誇る強豪も多数登場しました。RoboTechは予選で一敗を喫したものの、その後勝ち進み、決勝では、大応援団を従えた地元中国チームを大接戦の末、制しました。RoboTechの優れた技術と完成度の高い取り組みは、他の諸国のチームから強い関心を集め、熱心な情報交換と、それを通じた有意義な国際交流がなされました。

この優勝の背後には、激しい議論を伴う課題の徹底的な分析と最適戦略の立案、0.1秒の高速化はじめ、極限性能を追求したメカトロニクス、他国の追随を許さない高度な知的ソフトウェア技

術、実戦前の点検リストに始まり、あらゆる現場トラブルの想定と対応準備、限られた資源のもとでの最適開発計画、チームの力を最大限引き出す組織運営など、あらゆる面で知恵を振り絞った取り組みがあります。それは、「ロボコンで勝ちたい」、「ロボットを作るために東大にきた」、という純粋な熱意で結ばれた学生達が、自ら学び、磨き、先輩から後輩へと継承しつつ数年間にわたり進化させて来たものです。そのベースにはもちろん各学科におけるしっかりした教育の裏づけがありますが、それが学生自身の内発的な強力な動機と出会った時のパワーには、驚くべきものがあります。

大学側も、工学部ものづくり資金制度、丁友会援助金等の資金援助、ならびに、工学部および機械系3学科の格別の努力による活動スペース提供、そして多くの教職員からの助言や声援といった積極的な支援により、学生達の努力を結実させる手助けをしました。

RoboTechは今、さらに高い目標を自らに課して、再び全力投球しています。どうぞ声援ください。

RoboTechホームページ：
<http://www.mech.t.u-tokyo.ac.jp/~robotech/>



世界選手権で活躍する東大運動部学生とOB

現在、東京大学運動会には53の運動部があり、各部では多くの部員が、学業の傍ら日夜練習に励んでいます。彼らの中には本業の学問もさることながら、運動部として世界を舞台に活躍する学生もいます。今年もヨット部クルーザー班がJ24世界選手権に出場、相撲部ペテル・マトウシュ主将が世界相撲選手権に出場し活躍しました。また、今年の世界陸上競歩で好成績を残した明石顕さんは陸上運動部OBです。東大の運動部として世界に羽ばたくこれらの部からコメントをいただきました。

ヨット部クルーザー班

世界選手権出場

2005年イギリス大会 40位

J24世界選手権大会は、オリンピックのないJ24クラスにとって、名実ともに世界一決定戦であり、今回もプロ・アマ含め各国から

強豪の集う大会となりました。このような最高の舞台に参加できたことは、非常に喜びであるとともに、これまで我々のスキルを確認し、更に高いレベルを目指していく非常に良い機会ともなりました。この経験を風化させず次回の世界選手権に向けて精進して参りたいと思います。

(ヨット部クルーザー班 主将 平出篤志)

相撲部

世界選手権出場

チェコ代表 ペテル・マトウシュ

今年、日本で行われた第13回の世界相撲選手権大会に、チェコ代表として出場しました。近頃、マスコミの間では、「東大の琴欧州」と呼ばれていますが、個人戦では惜しくも本物の琴欧州の先輩でもあるブルガリアの選手に敗れました。しかし団体戦では3位決定戦まで勝ち進み、東大での稽古の成果を世界に見せることができました。また、自

分より大きく、力強い人に勝つことの魅力を体感することができました。

我が相撲部は、格闘技の経験がなくても、優れた技術を持つOBの指導のおかげでも卒業までに世界レベルまでいけます。

(相撲部 主将 ペテル・マトウシュ)

陸上運動部

世界陸上ヘルシンキ大会

50km競歩 15位 明石 顕

我が陸上運動部OBの明石顕先輩が、各国の強豪選手たちと競いながら世界陸上という舞台で15位になられたことは、現役部員たちの力強い自信となっております。東大生が世界と対等に戦えるのだということを示してくれたからです。我々も先輩の輝かしい活躍に負けまいと、日本国内、そして世界という舞台で活躍できるよう日々鍛錬に励んでいます。と思っています。

(陸上運動部 主将 竹内昌男)



Information

サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S) 第1回国際シンポジウム ーサステナビリティ学の創生をめざしてー

主催 サステナビリティ学連携研究機構 (IR3S)
共催 東アジア研究型大学協会、日本経済新聞社
2月4日(土) 13:00~17:00
安田講堂
お問合せ: 研究協力部サステナビリティ学支援グループ
Tel: 03-5841-1386
URL: <http://www.ir3s.u-tokyo.ac.jp/>

公開シンポジウム「東アジア海域文化史研究の課題」

2月5日(日) 13:00~
大学院数理学部研究科講堂(駒場キャンパス)
お問合せ: 大学院人文社会系研究科 小島 毅
文科省科研費特定領域研究「東アジア海域交流」総括班事務局
Tel: 03-5841-1518
Email: ningbo@l.u-tokyo.ac.jp

卒業生による外国人留学生のための業界研究会

2月5日(日) 13:00~17:00
御殿下記念館ジムナジウム
お問合せ: キャリアサポート室 岡本、佐々木、上間、本村
Tel: 03-5841-2552, 2550
Email: careersupportorg@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

第2回 日中鳥インフルエンザシンポジウム "BIRD FLU" Second Japan-China Bilateral Symposium on Avian Influenza

2月6日(月)~2月7日(火)
医学研究所構内
お問合せ: シンポジウム事務局 中川
Tel: 03-5449-5254
Email: office@ims.u-tokyo.ac.jp

国際シンポジウム「国際河川管理における交渉・対話・認識の役割 ~真のサステナビリティに向けて~」

2月10日(金)
山上会館 大会議室
お問合せ: 大学院新領域創成科学研究科 中山幹康
Tel: 03-5841-7935
Email: nakayama@k.u-tokyo.ac.jp

公開国際シンポジウム「アジアのアルカリ性劣悪土壌の環境修復と生物生産」

2月17日(金)
農学部3号館4階大会議室
お問合せ: アジア生物資源環境研究センター 山本尚子
Tel: 03-5841-7531
Email: asia@ofc.a.u-tokyo.ac.jp

国際研究会議「死とその向こう側」

2月18日(土)~2月19日(日) 9:30~
本郷キャンパス 法文2号館1番大教室
お問合せ: 大学院人文社会系研究科 21世紀COE研究室
Tel: 03-5841-3736
Email: coe21@l.u-tokyo.ac.jp
URL: <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/shiseigaku/>

卒業生による業界研究会

2月18日(土) 13:00~17:00
御殿下記念館ジムナジウム
お問合せ: キャリアサポート室 岡本、佐々木、上間、本村
Tel: 03-5841-2552, 2550
Email: careersupportorg@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

21世紀COEプログラム「国家と市場の相互関係におけるソフトロー」 第6回シンポジウム

2月27日(月)
六本木アカデミーヒルズ49・オーディトリウム
<http://www.academyhills.com/forum/room/49/audit-orrrium.html>
お問合せ: 21世紀COEプログラム「国家と市場の相互関係におけるソフトロー」事務局
担当: 小崎典子
Tel: 03-5805-7297
Email: coe-law@j.u-tokyo.ac.jp

日露関係史料をめぐる国際研究集会 2006

主催: 日本学士院・東京大学史料編纂所
3月2日(木) 14:00~17:00
史料編纂所 大会議室
お問合せ: 史料編纂所内 東アジア科研事務局 犬飼
Tel: 03-5841-8411

メルプロジェクト・シンポジウム2006

3月4日(土)~3月5日(日)
本郷キャンパス 法文2号館
お問合せ: 大学院情報学環 水越伸
Email: shin@iii.u-tokyo.ac.jp

社会科学研究所附属日本社会研究情報センター創立10周年記念シンポジウム ~社会科学研究所とSSJデータアーカイブ~

3月8日(水) 13:30~
山上会館 大会議室
お問合せ: 社会科学研究所附属日本社会研究情報センター 佐藤朋彦
Tel: 03-5841-4934
Email: tomohiko@iss.u-tokyo.ac.jp

UTCPシンポジウム「共生のための技術哲学」

主催: 東京大学21世紀COE「共生のための国際哲学交流センター (UTCP)」

3月10日(金)~3月12日(日)
教養学部18号館1Fホール(駒場キャンパス)
お問合せ: UTCP事務局
Tel: 03-5454-4379
Email: secretary@utcp.c.u-tokyo.ac.jp
URL: <http://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/top.html>

秩父演習林公開講座「冬の森林観察~春を待つ樹木たち」

3月11日(土) 9:10~16:00
秩父演習林事務局
お問合せ: 秩父演習林 企画調整係
Tel: 0494-22-0272
Email: chichibu@uf.a.u-tokyo.ac.jp
URL: <http://www.uf.a.u-tokyo.ac.jp/chichibu/>

卒業生による業界研究会

3月11日(土) 13:00~17:00
御殿下記念館ジムナジウム
お問合せ: キャリアサポート室 岡本、佐々木、上間、本村
Tel: 03-5841-2552, 2550
Email: careersupportorg@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

原洋之介教授最終講義「アジア研究と経済学の狭間で」

3月16日(木) 14:00~
東洋文化研究所 3階大会議室
お問合せ: 東洋文化研究所 研究協力係 中村明彦
Tel: 03-5841-5836
Email: kenkyo@ioc.u-tokyo.ac.jp

平成17年度第2回学生表彰「東京大学総長賞」授与式

3月23日(木) 17:00~18:30(予定)
理学部1号館 小柴ホール(予定)
お問合せ: 学生部学生課学生生活チーム 担当 大八木・宮内
Tel: 03-5841-2529, 2514
Email: gakuseiseikatsu@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

第28回動態ミニシンポジウム

3月23日(木)
医学部鉄門記念講堂
お問合せ: 薬学部分子薬物動態学教室 ミニシンポ事務局 担当: 岡嶋
Tel: 03-5841-4770, Fax: 03-5841-4766
URL: <http://www.f.u-tokyo.ac.jp/~sugiyama/index.com>

The international workshop on the interaction of particles and photons with matter 国際ワークショップ「粒子・光子と物質の相互作用」

3月25日(土)
都市センターホテル(千代田区)
お問合せ: 大学院総合文化研究科広域科学専攻 山崎泰規
Tel: 03-5454-6521

Information

Email: yasunori@phys.c.u-tokyo.ac.jp
URL: http://radphys4.c.u-tokyo.ac.jp

東京六大学野球春季リーグ戦

4月8日(土)～6月4日(日)

明治神宮野球場
お問合せ: 学生部学生課体育チーム
Tel: 03-5841-2511
(参考) 東京大学運動会ホームページ
http://www.undou-kai.com

パスツール研究所シンポジウム(仮称)

4月18日(火)～4月19日(水)

医科学研究所構内
お問合せ: 医科学研究所・細胞増殖部門分子発癌分野 井上教授
Tel: 03-5449-5275

医科学研究所大学院進学説明会

4月22日(土) 10:00～(予定)

医科学研究所構内
お問合せ: 医科学研究所総務課庶務係(大学院事務室)
Tel: 03-6409-2045

第58回

東商戦(対一橋大学ボートレース)

4月30日(日)

戸田オリンピックボートコース(埼玉県戸田市戸田公園)
お問合せ: 学生部学生課体育チーム
Tel: 03-5841-2511
(参考) 東京大学運動会ホームページ
http://www.undou-kai.com

医科学研究所創立記念シンポジウム

6月1日(木) 13:00～17:00(予定)

医科学研究所構内
お問合せ: 医科学研究所総務課庶務係
Tel: 03-5449-5572

保健体育寮夏期特別開寮

7月中旬～8月下旬

各保健体育寮
《戸田寮》静岡県沼津市戸田2710-3
《山中寮》山梨県南都留郡山中湖村平野506-296
《下賀茂寮》静岡県賀茂郡南伊豆町加納463
《乗鞍寮》長野県安曇郡安曇村字高原4307-7
お問合せ: 学生部学生課体育チーム
Tel: 03-5841-2511
(参考) 東京大学運動会ホームページ
http://www.undou-kai.com

総合研究博物館展示予定

総合研究博物館開館10周年記念

アフリカの骨、縄文の骨―遥かラミダスを望む

新規収蔵展示

重井陸夫博士コレクション「ウニの分類学」展

常設展示

「Systema naturae 標本は語る」展

いずれも開催中、4月16日(日)まで

お問合せ: Tel: 03-5777-8600 (ハローダイヤル)

駒場博物館展示予定

特別展

江戸の声―黒木文庫でみる音楽と演劇の世界

3月27日(月)～5月7日(日)



常磐津正本「拙筆カ七以呂波」(にじりがきなついろは)。国文学漢文学教室黒木文庫蔵。文政11年(1828)3月、2代目中村芝翫が江戸中村座で初演した常磐津・長唄の変化舞踊。表紙には常磐津の二曲「芥太夫」(ごみたゆう)と「瓢箪鮫」(ひょうたんまづ)を一つにして描いている。

特別展

聖書を生きる: 聖書の成立からユダヤ教へ

5月末～7月末

お問合せ: 駒場博物館
Tel: 03-5454-6139, Fax: 03-5454-4929

淡青

[TANSEI]

2006/01

17

東京大学広報誌

The University of Tokyo Magazine January, 2006 Vol.17

本号の編集にあたっては、学内はもとより学外の方々からも多くのご協力をいただきました。

表紙および裏表紙の写真: 駒場図書館館内

編集発行/東京大学広報委員会 大木康(広報委員会委員長 東洋文化研究所 教授) 石見徹(編集長 大学院経済学研究所 教授) 沼野充義(大学院人文社会系研究科 教授) 白石さや(大学院教育学研究科 教授) 佐倉統(大学院情報学環 助教授)

デザイン/長谷川恵一 撮影/尾関裕士 印刷/株式会社アトミ 発行日/平成18年1月31日

東京大学総務部広報課

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 TEL: 03-3811-3393 FAX: 03-3816-3913 E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.u-tokyo.ac.jp



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

淡青

[TANSEI] 東京大学広報誌 第17号

The University of Tokyo Magazine January, 2006 Vol.17 2006/01

17

発行日/平成18年1月31日

編集発行/東京大学広報委員会 東京大学総務部広報課 〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号 TEL: 03-3811-3393 FAX: 03-3816-3913 E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp URL: <http://www.u-tokyo.ac.jp>